



発行者兼編集者
 鵜 戸 神 宮
 社 務 所
 印刷所
 西 日 本 印 刷



ごあいさつ

宮司 佐師朝規

明けましておめでとうございます

平成六年の新しい年を迎え謹みて年頭の御挨拶を申し上げます。

昨年は皇太子殿下と雅子さまの御成婚の儀が宮中三殿の賢所で齋行され、伊勢神宮におきましては第六十一回の式年遷宮が齋行される等めでたき年でありました。当宮におきましても奉祝記念として各行事をはじめ老朽せる別当先賢宮司の墓所の山門、由緒ある神橋玉橋の修復も目出度く竣工する事が出来ました。しかし九月三日南九州地方を襲った第十三号の台風により旧参道の樹齢三百年余りの老杉を始め八百三十本余りの樹木が倒れ、先に修復した楼門の一部、神門の銅板葺屋根も片方飛び散り其の他儀式殿、社務所、各職員職舎も被害を受けましたが、天上板の張替を始め特に被害の甚大な車輛祓所の御社殿も十二月には新築竣工する事が出来ました。御本殿は岩窟に鎮座しますのですこしの被害もなく、これも御神慮によることと有難き極でありました。

此の様に早く修復する事が出来ましたのも偏に氏子崇敬者各位の御協力、賜と心より厚く御礼申し上げます。

尚、被害に遭遇されました方々には衷心より御見舞申し上げます。当神宮は、風光明媚な豊かな天下の絶勝の地ではありますが、塩害をはじめ台風の被害も多く寸時のゆだんも許されません。

今後も職員一同協力一致精進致し、神宮発展と御神徳の昂揚に努めたく所存でありますので、此の上とも一層の御力添賜ります様御願い申し上げます。

末筆ながら、氏子崇敬者皆様方の御繁栄と御多幸を御祈念申し上げます御挨拶と致します。

新嘗祭

昨日からの冷え込みも一段と厳しくなつた十一月二十三日、青天のもと午前十一時より宮司以下祭員によつて厳肅に斎行され、責任役員、氏子総代をはじめ多数の参列を賜つた。

新嘗祭は宮中に於て執り行われ、新穀を天神地祇にお供えし、収穫を感謝すると共に、天皇陛下御自らこれを聞食される神事である。当宮でも神恩に感謝し、

日南市をはじめ南那珂郡の各地区から献米、献酒、献菓子等の奉納があつた。

今年は冷夏に見舞われ、米の作柄も戦後最悪となつたが、それでも参列者は収穫できた事に感謝し玉串を捧げていた。

私たちは、この機会に自然の恵みが如何に大切であるのかを肝に銘じておかなければならないと思う。

又、今年も鶴戸小学校四年生により、「こども神楽」が奉納された。

古代に於ける国際交流

宮崎公立大学 教授 長友 武



万葉集の額田王の歌に、愛媛県の熟田津にて作つた次のような歌がある。

熟田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今ほ漕ぎ出でな

一見すると、船出をしようとして満潮になるのを待って、それがかなえられて船出する歌のようであるが、日本書紀などを調べてみると、斉明天皇の七年、この

熟田津に軍隊が結集し、その後、筑紫の朝倉の宮に向つたのである。当時、朝鮮半島の西端に位置する小国ではあるが高い文化を誇つていた百済が大国の唐と新羅の連合軍によつて攻撃されるという事件が起つたのである。百済は日本に救いを求め、斉明天皇自から朝倉宮で陣頭指揮をとることになった。この時の額田王は女性の斉明天皇の御言持という、現代の内閣官房長

官的職務にあり、天皇の二人の皇太子（兄が中大兄皇子、後の天智天皇、弟が大海人皇子（後の天武天皇））のうちの弟君の妻という立場にあつた。同時に彼女は鏡女王らとともに万葉集を代表する女流歌人でもある。天皇の御言葉や軍隊に伝える仕事は、言葉には魂があると信じられた古代社会に於いては非常に重要な職務であつたかは分る。筑紫の朝倉の宮で戦いの途中で、斉明天皇は病死し、朝鮮半島への出兵は西海岸の白村江の戦いで、唐と新羅の連合軍に、日本と百済の軍は大敗を喫することになり、百済の最後の拠点の州柔城も陥落し、百済の学者、医者、文化人の多くは日本軍とともに命からがら日本に向つたのである。この白村江の戦いは日本が初めて他国に出兵した戦いであつた。その後、額田王は弟君の大海人皇子のもとから、兄の中大兄皇子との恋に走り、斉明没後、天智天皇として即位した中大兄皇子とともに、現在の滋賀県の大津に唐の都の長安を手本として、志賀の都を建設し琵琶湖の水運を利用し都は繁栄した。しかし、不幸にして天智天皇は病に死し、その後継者として、天皇の弟君である大海人皇子と天皇の子供中を二分する程の激しい内乱が起つた。この内乱が壬申の乱であり、勝つた大海人皇子は、再び都を奈良の飛鳥に移すわけである。このような内外での激しい動乱の中で、百済からの学者、医者、文化人達は揺籃期のわが日本の基礎造りに大きな貢献を果したのである。

戸 鵜



比木神社

実に興味深いことである。南郷村に住み着いた父王と二男の所に追討軍が来襲し、それを木城町の長男が撃退させたことも伝えられている。毎年、年の瀬の師走祭りでは南郷村の神門神社と木城町の比木神社で同時に行われ、対面祭りとも言われ、別々の所に住まなければならなかつた百済の王族達を慰める祭りでもある。これらの伝説を裏づける物として、村に残されている銅鏡が正倉院のそれと類似

しているなど、今後の研究が期待されている。伝説を学問や科学の力で分析することは必要かもしれないが、伝説の持っている神秘性やロマンはそのままじつと大事に温めてゆきたいと思う。南郷村や木城町に残されている百済の王族の伝説は、椎葉村に残されている平家の落人伝説と同じく価値のある伝説ではないかと思われる。



韓国親善訪問

今から約千三百年程前の百済滅亡の話は、現在残されている書物としては日本書紀や万葉集しか頼りになる文献はないけれども、伝説として人々の口に語り伝えられてきた日向の百済伝説は最近の国際化ブームや村起こし運動のほほえましい題材になっている。

最近特にマスコミの用語として、また政治家の口を通してよくこの「国際化」や「国際人」が使われている。私の奉職しております宮崎公立大学も「国際文化研究」を建学の理念としている。別に国際化という現象は今始まったわけではなく、われら日向の人々の祖先と百済の人々はごく自然な形で、この国際化、国際交流を実現していた。当時の最先端の学問を修めた百済の人達は日向の山村に於いては尊敬の的となつたのである。

例祭日・霊鳥

権称宜 中武 信明

標題から察すると、いかにも堅苦しい内容と思われるかもしれないが、思いつくままに書いていこうと思うので、題とはかなりかけ離れた文が出てくるかもしれない。しかしその所は御容赦頂きたいと思つている。

宝暦十年（一七六〇）、鶴戸山別当隆岳撰の「鶴戸山女深記」（以下、玄深記）に興味ある箇所がいくつかあるので、今回は修正会と霊鳥に関して記してみたい。尚、修正会の行われた日は

基づく日本独自の貞享暦が用いられた。そして宝暦、寛政、天保と改暦されていった。

幕末になり、ペリーの来航によって開港を余儀なくされると、諸外国との国交が開け、太陰太陽暦(以下旧暦)と外国の太陽暦との違いからトラブル等が絶えなかつたようである。そして、明治政府の成立により改暦の主張が出てきたが、その後もこれらの不便さをかかえながらも天保暦が出版されていた。

しかし、明治五年十一月九日、改暦の詔書が突如として發布され、同時に太政官の布告をもって、来る十二月三日を明治六年一月一日とされることになった。

改暦の詔書によれば、旧暦が精密ではなく迷信暦注によって文明開化の進展に不便であることが挙げられているが、明治二十八年に刊行された「大隈伯爵日譚」によれば、政府の財政難が原因であったことが記されている。

何れにしても、改暦の準備は極秘裏に進められてい

た為、人々の驚きは如何ばかりであったろう。

この改暦が例祭日の変更につながる影響を与えたと思われ、一月六日(旧暦)に行われていた例祭が何故二月一日になったのか考えてみたいが、まず修正会と例祭の関係について触れておこうと思う。

修正会は玄深記によれば「正月五日から六日にわたる一大神事であり、夜半から岩窟で厳修され藩主の参詣もある。又、高野山でも正月一日から七日まで行われる。修正には弘法大師を始めとして諸々の神々も来臨され一時姿を表わされる。従って日本で一番の天下泰平を祈る加事祈禱である」と記してある。伝えるところによれば、鵜戸には年中五度の祭礼が厳修されたといわれ、その中で一大神事であった修正会が例祭となつたのも頷けそう。

次に二月一日を考えてみたい。明治七年十月に新納宮司より教部省に「鵜戸神宮例祭日は旧暦正月二テ御座候處先般御届之節者全ク心違

た。この願いが提出されたのが明治七年十月であるから、明治八年一月六日(旧暦)が新暦では何日に充たるかということを考えようである。明治八年は二月十一日となり、この日は御存じの通り、紀元節(現在では建国記念の日)である。明治五年に始まつたもので、改暦の結果二月十二日を紀元節と称せられることになり、同七年の暦に記載されている。その為、この御日出度い日は外されたのではないかと推察される。明治九年であるが御覧の通り一月三十一日である。二月一日は旧の一月七日となり一日ずれることになる。又、明治七年十月に明治九年の暦が、分かるのかという疑問もでてくる。しかし楽天的な見かたをすれば暦が出ていなかった為旧暦と新暦の合わせ方が間違つたとも考えられるが、まずそのようなことはないだろう。ましてや明治六、七年は例祭を行った後だし、明治十年こそは合わせ方が分からないだろうと思つた

充たる為、貢納の最中で人々は多忙であり、諸手当等がすぐに準備できず、又、不都合な事もあるので、今年より毎年二月一日を例祭日と改定させて頂きたい」ということだけは知ることができよう。

その結果、明治八年三月二日に「願之通二月一日例祭日ト御定相成候事」と許可されている。これらのことから考えると明治六・七年は旧暦の一月六日に、明治八年からは二月一日に例祭が斎行されたのだろう。

それでは、明治七年に提出された書面の中の「旧暦ヲ新暦致比較候處本行之日(二月一日)ニ相当」というのは何を基準にされて二月一日とされたのだろうか。左記に旧暦の一月六日が新暦の何日に充たるのか、明治六年から明治十年まで記してみると、

- 明治六年二月三日
- 明治七年二月二十二日
- 明治八年二月十一日
- 明治九年一月三十一日
- 明治十年二月十八日

た為、人々の驚きは如何ばかりであったろう。

この改暦が例祭日の変更につながる影響を与えたと思われ、一月六日(旧暦)に行われていた例祭が何故二月一日になったのか考えてみたいが、まず修正会と例祭の関係について触れておこうと思う。

修正会は玄深記によれば「正月五日から六日にわたる一大神事であり、夜半から岩窟で厳修され藩主の参詣もある。又、高野山でも正月一日から七日まで行われる。修正には弘法大師を始めとして諸々の神々も来臨され一時姿を表わされる。従って日本で一番の天下泰平を祈る加事祈禱である」と記してある。伝えるところによれば、鵜戸には年中五度の祭礼が厳修されたといわれ、その中で一大神事であった修正会が例祭となつたのも頷けそう。

次に二月一日を考えてみたい。明治七年十月に新納宮司より教部省に「鵜戸神宮例祭日は旧暦正月二テ御座候處先般御届之節者全ク心違

た。この願いが提出されたのが明治七年十月であるから、明治八年一月六日(旧暦)が新暦では何日に充たるかということを考えようである。明治八年は二月十一日となり、この日は御存じの通り、紀元節(現在では建国記念の日)である。明治五年に始まつたもので、改暦の結果二月十二日を紀元節と称せられることになり、同七年の暦に記載されている。その為、この御日出度い日は外されたのではないかと推察される。明治九年であるが御覧の通り一月三十一日である。二月一日は旧の一月七日となり一日ずれることになる。又、明治七年十月に明治九年の暦が、分かるのかという疑問もでてくる。しかし楽天的な見かたをすれば暦が出ていなかった為旧暦と新暦の合わせ方が間違つたとも考えられるが、まずそのようなことはないだろう。ましてや明治六、七年は例祭を行った後だし、明治十年こそは合わせ方が分からないだろうと思つた

- 明治六年二月三日
- 明治七年二月二十二日
- 明治八年二月十一日
- 明治九年一月三十一日
- 明治十年二月十八日

ニテ一月六日ト相認メ今更不都合之義二者御座候得共旧暦ヲ新暦致比較候處本行之日(二月一日)ニ相當ニ付来亥歳ヨリ毎年右之日ヲ以テ例祭日ト相定メ申度御座間何卒先御届者御取消ニ被成下此段奉懇願候也」と例祭の変更願いが出されている。これは、明治六年七月に「神宮以下諸社御祭日の儀は旧暦定日を新暦日に充て(中略)永く御祭日と被定候事」と布告されたことにより提出された何回目かの書面であろう。



例祭 宮司祝詞奏上

この中に「先般御届之節者全ク心違ニテ一月六日ト相認メ」とあるが、何故、前回までは布告された通り一月六日を認められなかったのだろうか。残念ながら、この間のやり取りの書面が見つかからないので分からな

い。布告の通り旧暦日を新暦日に充てるのなら、正月六日(旧暦)を一月六日(新暦)にするということであるが、同じ一月六日でも旧暦と新暦とは違う、旧暦で行つてこそ意義がある(玄深記に記載されている通り)と新納宮司は考えられたのではないか。その為、「例祭は今まで通り旧暦の一月六日に執り行います」という主旨の書面を提出されたのではあるまいか。そしてその間のやり取りがあり、不本意ながら一月六日を認められたのではないだろうか。

では、何故一月六日を例祭日とされなかったのか。翌八年一月に同じく新納宮司より、教部省に出された書面には「當神宮例祭日之儀従前正月六日ニ付則一月

六日例祭日ト被(中略)右ハ舊暦十一月二相当貢納最中ニテ人民殊ノ外繁劇ノ折故諸手當物等速ニ相調兼其他不都合之(中略)何卒自今毎年二月一日ヲ以テ例祭日ト御改定相成(中略)此段奉懇願候也」とある。

この中の「舊暦十一月二相当貢納最中ニテ」とは何の事であろうか。新嘗祭(古くより十一月の下の卯の日、三卯の時は中の卯が充てられた。当宮においても斎行されていたと思うが、資料を見いだせない)のことかもしれないが、貢納という文字が気にかかる。しかしその一方で、明治五年に改暦されて間もない為、民間には旧暦の例が根強く残つていて、新嘗祭(旧暦)に新穀を奉納されていたということも考えられる。(ちなみに、明治八年一月六日は、旧暦では前年の十一月二十九日となる。この月は三回卯の日があり、二十八日が三回目)しかし、これも他に資料がないので分からない。

何れにしても「一月六日は旧暦の十一月二十九日に

伝えていたように、二月一日が御祭神「鸕鷀草葺不合尊」が亡くなられた日なのだろうか。

結局のところ、どのような方法で「二月一日」と決められたのか分からないが、何故ということを考えてみると、夢を掻き立てられる例祭日ということが言えそうである。

次は話をがらりとかえ「靈鳥」について記してみた

玄深記に「昔より当山に一雌雄の鳥居り。此鳥に石窟の前にて御供の余りを取て飼を施す。但し山中に災あらん時は飼を喰まずと伝えり、然るに此鳥一雌雄の子を育てて親鳥は何国ともなく飛去りぬ、年々如此又此一雌雄の外此山に他所の鳥住まず、間々余所より来る鳥有りといえども程なく飛去りぬ、定て此鳥は神明の使しめならん」とある

が現在ではこの靈鳥の存在は明らかでない。「佛法僧は霧島山では宮鳥といひ、この鵜戸神宮境内にも少数は造巢するから或いはこの佛法僧を指すものであるか



インヒヨドリ

測するのである。

では佛法僧とはどんな鳥なのだろうか。確かにこの鳥は古くから靈鳥としてい

ていたかという点、徳川時

社務日誌抄

代に佛法僧の名でコノハズならぬブッポーソウが描かれていたこと。生息地が同じであること。コノハズクが夜行性で確認が困難であったことなどが挙げられているようだ。
現在ではコノハズクを「声の仏法僧」、ブッポーソウを「姿のブッポーソウ」と呼び分けられている。
古の鵜戸の境内を飛び回っていた霊鳥とは「姿の



大鳥大社 宮司 山本博之氏他

- 一月一日 歳旦祭
一月三日 元始祭
一月八日 日南地区交通安
一月二十五日 大鳥大社宮司山本博之氏他七名参拝
一月二十五日 九州地区別表神社宮司会出席の為宮司佐賀県へ出向
一月三十一日 大塚神社伶人、舞子会十三名参拝

- 二月六日 鵜戸稻荷神社例祭
二月七日 第四十回剣法発祥鵜戸山剣道大会
二月九日 熊本国税不服審判所部長栗原梨氏参拝
二月十一日 紀元祭
二月十二日 宮内庁桃山書陵部陵墓官八木敬三氏他三名参拝
二月十六日 加麻良神社宮司西田準一氏他八十名参拝
二月十七日 祈年祭
三月四日 福島県神社庁庁長宮本勝重氏他三名参拝
三月十三日 責任役員会
三月十八日 警察大学校副校長川田晃氏他二名参拝
三月二十八日 シャンシャン馬道中唄全国大会決勝
四月十四日 熊本県出水神社宮司松井葵之氏他十一名参拝



大麻比古神社 宮司 金倉文雄氏他

- 四月十七日 熊本県出水神社社務岩成邦忠氏他九名参拝
四月二十二日 大麻比古神社宮司金倉文雄氏他十七名参拝
四月二十七日 氏子崇敬者総代会
五月五日 節供祭奉祝行事いさみ太鼓奉納
五月十日 九州連合神職總會出席の為三輪祢宜他二名佐賀県へ出向
五月十二日 最高検察庁次長検事土肥孝治氏他四名参拝
五月十四日 國學院大學教授櫻井満氏他三名参拝
五月二十一日 別当宮司先賢慰霊祭
五月二十六日 神宮祢宜本城美臣氏他参拝
六月一日 穂高神社宮司穂高守氏他五名参拝
六月三日 神宮雅楽講習会受講の為河野権祢宜出向
六月五日 国家公安委員会委員那須翔氏他九名参拝
六月九日 皇太子殿下御成婚報告祭
六月十一日 南那珂神職研修会



穂高神社 宮司 穂高守氏

- 六月十一日 鶴岡八幡宮祢宜池田正弘氏他十五名参拝
六月二十二日 小野田石鏡神社松岡英雄氏他三十一名参拝
六月三十日 大拔式
七月五日 日南地区産業安全祈願祭
七月六日 鶴岡八幡宮権祢宜近藤薫之氏他十六名参拝
七月十八日 中堅神職研修会受講の為谷口祢宜県神社庁へ出向
七月二十日 責任役員会
七月二十九日 宮崎神宮宮童四十五名参拝
八月七日 龜山八幡宮宮司河原忠孝氏他三名参拝
八月十七日 中堅神職研修会受講の為谷口祢宜県神社庁へ出向
八月十九日 大阪府神社庁大阪支部柳澤喜和氏他十一名参拝



三重県神社庁庁長 宮崎吉保氏他

- 八月二十一日 白石持ち奉仕の為永友権祢宜神宮へ出向
九月二日 天皇皇后両陛下御渡御行幸啓安泰祈願祭
九月十日 責任役員会
九月十七日 県神社庁総会出席の為宮司、役員、総代、職員県神社庁へ出向
九月十七日 三重県神社庁庁長宮崎吉保氏他一名参拝
十月五日 熊本老神社社總代池田国義氏他二十一名参拝
十月二十日 責任役員会
十月二十九日 宮内庁書陵部桃山陵墓監区事務所陵墓監寺田喜彦氏他三名参拝
十月三十日 鹿児島神宮宮司川上親昌氏他十四名参拝



鹿児島神宮 宮司 川上親昌氏

- 十一月三日 明治祭
十一月七日 片山八幡神社宮司吉見英和氏他三十七名参拝
十一月八日 士別神社宮司佐藤公聰氏他四名参拝
十一月十日 比布神社祢宜鎌田吉人氏他九十一名参拝
十一月十二日 當麻神社宮司鎌田正彦氏他九十二名参拝
十一月二十三日 新嘗祭
十二月二十七日 天長祭
十二月三十一日 大祓式、除夜祭



比布神社 祢宜 鎌田吉人氏



士別神社 宮司 佐藤公聰氏

宮司 三吉朝規
祢宜 谷口謙二
出仕 永東謙二
齋女 佐藤東二
出仕 永東謙二
齋女 佐藤東二
出仕 永東謙二
齋女 佐藤東二

謹賀新年

玉橋改修 山門改築

本殿に参拝する為に渡る玉橋。別当墓地にお参りする為に通る山門。両方とも損みがひどくなってきた為、改修・改築の運びとなり九月一日に無事に清祓を執り行う事が出来た。

玉橋は、鵜戸山玄深記(一七六〇年)に反橋(ソリハシ)と書かれてあるのだが、明治十一年に提出された書



類には玉橋と記されていて、いつ頃から玉橋と呼ばれるようになったのか定かではない。

山門は、天台宗の僧と伝える光喜坊快久が勅命を蒙って初代の別当となつてから一千二百年を向えた昭和五十六年に建てられたものである。

台風十三号

九月三日、鹿児島県に上陸した戦後最大級の台風十三号は、各地に大きな爪痕を残していったのは御承知の通りである。

当宮も車祓所の倒壊、杉の倒木約八百本、神門の屋根半分が飛ばされた他、楼門、社務所等にも少なからぬ被害があった。山の青葉も木々の枝だけが目立つようになり晩秋を思わせる風

景が一夜にして広がり、その面影は見るに忍びない。

今にして思えば、午前中は台風が接近して来るといふのに海は穏やかで、風もそれほど吹いている訳でもなく、本当に台風が来ているのだろうかと思わせる天気だったのだが、午後から急に猛り狂い始めたのは、嵐の前の静けさだったのだろう。

編集後記

○本号発行に際し、宮崎公立大学教授長友武様には御多忙中にも拘りませず玉稿を賜り、誠に有難うございました。紙面をもちまして厚く御礼申し上げます。

○今年は戌年。ところで、妊婦が五ヶ月目の戌の日に岩田帯をすると安産であると、古くより言い伝えられています。この戌の日というのは、犬は多産でしかも安産という性質があり、それにあやかる為だとか。又、岩田帯は、神功皇后が妊娠されたときに腰に帯を巻かれたのがはじまりと言われています。つまり、戌の日と岩田帯とは別々のものではありますが、両方とも安産を願うところから、この行事が定着したようです。

(中武)

